

大学生の不登校に繋がる登校回避感情が生じる要因についての検討

特別支援教育・臨床心理学コース 臨床心理学専修
成田 正樹

1. はじめに (目的)

日本における大学生の不登校は、小柳(1994)によって初めて報告された。鶴田ら(2002)は、「どのような学生にも一時的な不登校は生じうる」と指摘しており、大学生の不登校は精神的健康度が高い大学生にも生じる可能性がある。文部省高等教育局医学教育課(2000)、日本学生支援機構(2007)は、大学生の不登校に対する支援・相談の必要性を提起している。

磯部ら(2006)が述べているように、「不登校という現象を糸口にする事で」、適応に課題を抱えた学生への支援が可能になり、アパシーや対人恐怖といった従来の視点とは異なる切り口でアプローチが可能になると考えられる。

そこで、本研究では、不登校に陥っていない大学生を対象にして、「大学に行きたくない」という登校回避感情が生じる要因と、登校回避感情を乗り越えて登校する要因を明らかにし、潜在的に支援が必要である大学生に対する支援方法を検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者：首都圏にあるA大学の学部学生58名(男性25名、女性33名、平均年齢：20.7歳、SD：1.29)。
調査時期：2016年11月から2017年1月。

調査内容：登校回避感情が生じた頻度について、選択式で回答を求めた。次に、登校回避感情が生じた頻度に応じて、①「大学に行きたくない」と思った理由、②「大学に行きたくない」と思ったのに大学に行った理由、③「大学に行きたくない」と全く思わなかった理由、それぞれについて自由記述式で回答を求めた。

3. 結果と考察

登校回避感情が生じた頻度は、「いつも」が5%、「頻繁に」が21%、「ときどき」が57%、「全くない」が17%であった。「いつも」、「頻繁に」、「ときどき」の合計は、83%であった。調査対象者の多くが登校回避感情を感じており、不登校に陥っていない大学生であっても、潜在的に支援が必要である大学生が多く存在していると考えられる。

自由記述により得られた回答は、心理学を専攻する大学院生3名により、KJ法を用いて分類された。上位5つのカテゴリーを、回答が多い順に以下に示す(表1、表2、表3)。

表1「大学に行きたくない」と思った理由

No.	カテゴリー名	具体例
1.	学業	授業に魅力がないため
2.	眠さ・早起き	早起きが辛い
3.	面倒さ・つまらなさ	すべてが面倒くさい
4.	友人・人間関係	友人が少ない
5.	正課外活動	部活動・サークルがある

表2「大学に行きたくない」と思ったのに大学に行った理由

No.	カテゴリー名	具体例
1.	単位取得・卒業	単位を落とすたくない
2.	通学への規範意識	大学に行くのは当然
3.	友人の存在	友人に会える
4.	親の存在	親に言われた
5.	正課外活動	頑張っている活動がある

表3「大学に行きたくない」と全く思わなかった理由

No.	カテゴリー名	具体例
1.	学業	授業が魅力的
2.	登校回避感情の低さ	それほど面倒ではない
3.	通学への規範意識	大学に行くのは当たり前
4.	友人の存在	友人に会える
5.	学費	学費がもったいない

表1から、現実的要因(学業、正課外活動)や、モラトリアムの要因(眠さ・早起き、面倒さ・つまらなさ)、対人的要因(友人・人間関係)によって、登校回避感情が生じると考えられる。表2から、義務的意識(単位取得・卒業、通学への規範意識)や、友人の存在・親の存在が、登校回避感情を乗り越えて登校する要因になると考えられる。

表1および表2には正課外活動が、表1および表3には学業が挙げられており、同じ要因が別々の方向に働く可能性が示唆されている。今後の研究により、それぞれの要因がどのように個人に働くのかを明らかにする必要がある。